

# 見つからない

二宮 正作

二宮 勇樹、黒川 宏和 … 二役

二宮 佳純、二宮 恵 … 二役

とある山の深い場所。

安っぽいログハウスの様な家。

窓には色とりどりのセロファンが貼られている。

大き目の木の枝で作った十字架が部屋の中央に置かれている。

陽が差すと、教会の様な趣きになる。

舞台上、中央前方に椅子が置いてある。

客入れ

照明、ゆっくりと暗転

照明、うつすらと全体を照らす

二宮正作（以下正作）が、一心不乱に床を吹いている。

照明、ゆっくりと暗転

照明、椅子を照らす

正作、ゆっくりと登場し、椅子に座る

正作 今日、ね、ひどく体調が悪いんだ。

体調が悪い日は、昔のことを思い出す。

君はどうだい。

今日の様な、穏やかな秋の日。

少しだけ風が吹いて、落ち葉のカサカサつて音が、心地良く聞こえてね。

西日が眩しくて。暖かくて。

でもね、身体の芯は冷えてる。

…

1986年、…。

まあ、そんなことはどうでも良い。

だって、人の愚かさは、昔から何も変わってないんだから。

君もそう思うだろう。

私はね、生まれた時からずっと愚かだったよ。

目的論的生命観という言葉を知ってるかい。

大雑把に言えば、あらゆるものは、目的があつて存在してるつてこと。  
我々人間も何かの目的があつて、生命体として存在するわけだ。

::

そんなことはどうでも良いか。

そうだね。

今日はね、ひどく体調が悪いんだ。

体調が悪い日は、昔のことを思い出す。

照明、暗転

照明、ゆつくりと舞台全体を照らす

一宮佳純（以下佳純）登場

佳純 お父さん。

正作 ::うん。

佳純 何してるの。

正作 うん。

佳純 ::

正作 どうした。

佳純 話があるの。

正作 うん。

佳純 私ね、家出ようかなつて。

正作 ::

佳純 駄目かな。

正作 ::

佳純 やつぱり、職場に近いところに住みたいなつて。

ほら、最近仕事も忙しいし。

正作 ::

佳純 もちろん、あれだよ。

ここからそんな遠くないと。

何かあつたら、すぐに帰つてくれるくらいのところ。

正作 佳純。

佳純 ::はい。

正作 佳純は、お母さんに似てきたね。

佳純 ::そう。

正作 ああ。

綺麗になつた。

佳純 ::ありがとう。

正作 良いんじゃないか。

佳純 ::え。

正作 一人暮らし。

父さんは良いよ。大丈夫だ。  
佳純 本当。  
正作 ああ。  
そういう時期もあった方が良い。  
勇樹もいるし。  
お前らが小さい頃は、お父さんが家事を全部やってたんだ。  
何の問題もない。  
佳純 ありがと。  
絶対に反対されると思ってた。  
正作 ∴  
佳純 いつ。  
正作 え。  
正作 いつ、引越すんだ。  
お前のことだ。  
もう、部屋も決めてるんだろ。  
佳純 まあ。  
まだ契約はしてないけど、もう目ぼしはつけてる。  
お父さんが許してくれはって思ってたの。  
こんなにすんなり、お父さんが、良いつて言ってくれる  
正作 佳純。  
佳純 何。  
正作 本当に綺麗になった。  
佳純 何。どうしたの。  
正作 何だか、今日は、佳純を見ていると、妙にお母さんを思い出す。  
佳純 ∴  
正作 仕事は順調なのか。  
佳純 順調だよ。  
正作 忙しいのか。  
佳純 そうだね。  
それなりに任せてもらえるものも増えてきたし、忙しいけど、楽しいよ。  
正作 ∴  
佳純 彼氏は。  
正作 え。  
正作 ∴  
佳純 佳純は、もてるだろ。  
佳純 そんなことないよ。全然。  
会社に綺麗な人いっぱいいるし、私なんか地味なものだよ。  
正作 父さんが言うのも何だが、佳純は良い女だ。  
佳純 親馬鹿だよ。  
正作 親馬鹿か。

佳純 親馬鹿だよ。  
正作 見てみたいな。  
佳純 何。  
正作 佳純の彼氏。  
佳純 ちよつと。  
やだ。どうしたの。  
別に、もう一度と会えないってわけじゃないんだよ。  
確かに家はあるけど、そんな遠くじゃないし。  
すぐ帰ってこれるところだから。  
やだ。  
お父さん、何か、今日、重いよ。

二宮勇樹（以下勇樹）、登場  
鼻血が出ている

勇樹 俺は反対だな。  
佳純 お兄ちゃん。  
∴  
勇樹 どうせ、男のために、引越すんだろ。  
佳純 ∴お兄ちゃん、鼻血。  
勇樹 え。  
佳純 ∴  
勇樹 すまん。

佳純、震えて、その場に座り込む。

正作 佳純。  
勇樹 佳純。  
佳純 大丈夫。  
大丈夫。

正作、勇樹、佳純に寄りかかろうとする

正作 お前は、顔拭いて来い。  
勇樹 あ、ああ。

勇樹、退場  
正作、佳純を介抱する

佳純 ごめん。

正作  
：  
佳純 大丈夫。大丈夫。  
正作  
：

勇樹、登場

勇樹 大丈夫か。  
佳純 大丈夫。  
勇樹 すまん。  
佳純 ううん、私の方こそ、ごめん。  
勇樹 すまん。

佳純、立ち上りとする。

正作 大丈夫か。  
勇樹 無理するな。  
まだ座ってる。  
佳純 大丈夫。  
正作 座ってる。

正作、椅子に佳純を座らせる

椅子に座る佳純。それを見守って傍に立つ正作と勇樹。家族写真のように。

佳純 ごめんね。  
勇樹 俺の方こそ。  
佳純 本当駄目だね。  
女のくせに血に弱いつてね。  
生理は大丈夫なんだけどね。  
流れてるのを見ると  
勇樹 いいよ、喋るな。  
佳純  
：  
勇樹  
：  
正作  
：

佳純、大きく深呼吸

勇樹 大丈夫か。  
佳純 うん、大丈夫。  
ごめんね。  
勇樹  
：

佳純　でもさ、私より、お兄ちゃんだよ。  
お兄ちゃんのほうこそ大丈夫なの。

勇樹　ああ。

佳純　お兄ちゃんの方がやばいでしょ。  
何、寝てないの。

勇樹　俺は大丈夫だから。

佳純　大丈夫じゃないでしょ。

ちゃんと休まないよ。

お父さんも、お兄ちゃんも、一回自分の世界に入ったら、入りこんじゃって、色んなこと  
忘れすぎだから。

寝るのも、ご飯も。

そういうとこね、似すぎだから。

もう。安心して、私をこの家から出させてよね。

勇樹　そうだ。

佳純　待った。

今日は、お兄ちゃん、私に何も言う権利ないよ。

お兄ちゃん、自分で自分の話の腰折ったんだから。

勇樹　いや、それは。

佳純　お父さん、許してくれたしね。

正作　勇樹。

良いんだ。

勇樹　父さん。

正作　勇樹。

勇樹　∴

正作　どうした。

佳純　ううん。

ちよつとね、覚えておこうと思っで。

やめてよ。

私までしんみりしちゃうじゃない。

勇樹　∴

正作　∴

三人、正面を見る

照明、ゆつくりと暗転

勇樹、佳純退場

正作、椅子に座る

照明、椅子を照らす

正作　ぎりぎりのところだったんだ。

最初から、そうだったのかもしれない。

最初から、ずっとぎりぎりのところにて、毎年、数ミリずつ限界の方向に向かっているのにも気付かずに、ついに、私たちの足元には、何もなくなった。

多分、私も、勇樹も、佳純も。

仲の良い家族だった。

あの事件が起こる前も、…起こった後も、我々は仲の良い家族だった。

もちろん、色々な問題は抱えてたよ。

勇樹はそこそこ大きかったけど、佳純はまだまだ小さかったからね。

母親が突然いなくなったんだ。

動揺しないわけがない。

勇樹だってそうだ。

お兄ちゃんとして、佳純を支えてはいたが、眠れない夜もあったし、突如鼻血を流したり。

それでも、我々は、みんなで支え合ってきた。

でも、それも、ずっとぎりぎりのところだったんだ。

照明、ゆつくりと全体を照らす

正作、そのまま椅子に座っている。

二宮恵（以下恵）、黒川恭和（以下黒川）登場

黒川 お久しぶりです。

恵 ∷

お久しぶりです。

今日は、どうしたんですか。

黒川 先生は、ご在宅ですか。

恵 外出しています。

黒川 そうですか。

本当、御無沙汰してしまつて、申し訳ありません。

恵 いえ。

黒川 元気でしたか。

恵 はい。

黒川 ∷

恵 ∷

黒川 僕も元気でした。

恵 そうですか。

黒川 おかげさまで、少し偉くなりました。

恵 ∷

黒川 忙しさにかまけて、ご挨拶に伺えなくて、本当に申し訳ありません。

恵 何もしてませんよ。

黒川 ∷

恵 私たちは、何もしてませんよ。

黒川さんが頑張ったから。

ご自分の力で、出世されたんです。  
私たちは何もしてませんよ。  
黒川 そんなことありませんよ。  
僕なんて、無力なものです。  
才能ある人が産みだしたものを、世に紹介してるだけですから。  
恵 黒川さんに見る目があるんですよ。  
どんなに才能があつても、埋もれていく人も、たくさんいらつしやるでしょう。  
黒川 才能がある人は、どんな形であれ、世に出ていきます。  
僕なんて。  
：  
僕は、人の物を使わせてもらつてるだけです。  
：  
恵 私は、私です。  
黒川 もちろんです。  
恵 ：  
黒川 ：  
公園の銀杏の木。  
綺麗に紅葉してましたね。  
鮮やかすぎるくらいの黄色でした。  
恵 綺麗ですよ。  
黒川 僕は、銀杏の紅葉が、あまり好きではありません。  
恵 そうなんですか。  
黒川 鮮やかすぎます。  
力がみなぎっているようで。  
赤茶色の、朽ちた感じの方が、秋にはふさわしいと思いませんか。  
木から落ちたはずなのに、まだまだ想いが残つてる。  
見ていると切なくなります。  
恵 黒川さんも、小説をお書きになればいいのに。  
黒川 僕はもう、諦めました。  
公園の銀杏の木を見ながら、昔のことを思い出しました。  
最初に先生のところへ伺つたのも、今くらいの季節でした。  
恵 そうでしたっけ。  
黒川 ええ。  
大きな銀杏がある公園を曲がつて。  
そう教えてもらつたので、印象深いんですよ。  
あの時も、鮮やかな黄色でした。  
何となく、すんわりいかないんだろうなって思った記憶があります。  
案の定、先生は、小説の挿絵に対して、あまり積極的ではなかった。  
たまたま知人の紹介で、奥さんと知り合い、先生を紹介してもらつて、困惑しました。  
恵 あの頃は、私たちも、相当貧しかったですからね。



黒川 主人が乗り気だろうが、乗り気じゃなかろうが、正直、本当に助かりました。  
最初は、良い返事をもらえなくてね。  
ですが、何度か通つてるうちに、先生も心を開いてくださつて。  
恵 黒川さんには、本当にお世話になりました。  
黒川 いえ。  
僕が一目惚れしたんです。  
だから、先生の絵を、是非とも使わせていただきたいと思つたんです。  
恵 ∴  
黒川 先生は、奥さんの様な人に支えてもらつて、本当に幸せです。  
恵 ∴  
そんなことはありません。  
私のような農妻。  
黒川 うちの家内にも見習つて欲しいくらいです。  
恵 ∴  
黒川 ∴  
恵 結婚されたんですか。  
黒川 ええ。  
2年前に。  
恵 ∴  
黒川 どうしたんですか。  
ほつとした顔されて。  
恵 そんなことはありませんよ。  
おめでとらうございます。  
黒川 ありがとうございます。  
恵 ∴  
どんな方ですか。  
黒川さん、おもてになるから、綺麗な方なんでしょうね。  
黒川 あなたに似た人です。  
恵 ∴  
黒川 あなたによく似た人です。  
恵 ∴  
黒川 男なんて、そんなものです。  
恵 ∴  
帰つてください。  
黒川 先生にまた、仕事をお願いしたいと思ひまして。  
恵 ∴  
黒川 今、僕が担当している作家なんですけど、一押しでね。  
本当に良い文章を書くんです。  
我が社としても、是非売れてもらいたい。  
記念すべきデビュー作の装丁を、先生にお願いしたいと思ひまして。

恵 知ってましたよね。  
黒川 ：  
恵 主人がいないこと。  
黒川 はい。  
恵 お別れしたはずですよ。  
黒川 ええ。  
恵 だったら何で。  
黒川 一方的に、別れを切り出されました。  
恵 そんなものでしょうか。  
黒川 ええ。  
恵 ですが、僕は、あなたのことを、本当に愛していた。  
黒川 私は、黒川さんのことを愛していませんでした。  
黒川 聞きました。  
恵 何度も、何度も。  
黒川 このやりとりも懐かしいですね。  
恵 ：  
黒川 本当にですか。  
恵 本当にです。  
黒川 微塵も。  
恵 微塵も。  
黒川 怖い人だ。  
恵 ：  
黒川 女なんて、そんなものです。  
恵 帰ってください。  
黒川 嘘です。  
恵 ：  
黒川 うちの家内が、奥さんに似てるというのは、  
全然似てません。  
恵 そんなの苦しすぎます。  
黒川 どつちにしり、5年以上前の話です。  
恵 今さら、どうこうしようなんて、僕も思いませんよ。

正作、椅子から立ち、二人の方を見る

恵 ：  
黒川 一つだけ聞きたいことがあります。  
恵 ：  
黒川 先日、偶然ですが、勇樹くんを見かけました。  
恵 ：

黒川 大きくなりましたね。

恵 ∴

黒川 勇樹くんは、僕の子じやないですか。

恵 ∴

黒川 久しぶりに見て、僕には、勇樹くんが、すぐに勇樹くんだとわかりました。  
なぜだかわかりますか。

僕の子どもの頃にそっくりだった。  
時期的にも。

恵 やめてください。

黒川 ∴

恵 勇樹は、主人と私の子どもです。  
あなたには、何も関係ありません。

黒川 嘘だ。

恵 嘘じやありません。  
勇樹は、間違いない、主人と私の子どもです。

黒川 勇樹くんだけじやない。

佳純ちゃんも、  
やめてください。

黒川 ∴

恵 帰ってください。

そして、一度と、私たちの前に現れないでください。

主人の絵も、今は、それなりに評価されて、生活も、つつましく生きていく分には、何の  
問題もありません。

主人もきつと、小説の装丁に興味なんてないと思います。  
ですから、

私たちの前に、一度と現れないでください。

黒川 ∴

恵 ∴

黒川 僕は、本当に、あなたのことを愛していました。

あの日、あなたに一方的に別れを告げられてから、僕は、ずっと空っぽでした。  
年甲斐もなく、空っぽになったんです。

自分が何のために生きているのか、生きていかなければいけないのか、

それでも、僕のような凡人は、生きちやうんですよね。

仕事に没頭して、偉くなって、何となく結婚して、

恵さん、僕は確信してます。

勇樹くんも、佳純ちゃんも、僕と、あなたの子どもですよ。

恵さん、僕のことを

恵 黒川さん。

私は、あなたのことを、愛してません。

私が愛してるのは、主人と、勇樹と、佳純だけです。

今までも。  
これからも。  
：

正作、猟奇的な叫び声をあげる  
照明、ゆっくりと暗転

照明、ゆっくりと全体を照らす  
正作、椅子に座っている。

正作 知っていました。  
勇樹も、佳純も、私の子じゃないことを。  
なぜ。  
確かに。  
私のような、鈍感な男が、妻の不貞に気付くわけがない。  
実際私は、妻と黒川くんことは、一切知りませんでした。  
悲しいかな。  
怪しいとすら思いませんでした。  
妻は、恵は、私のことを心から支えてくれていたし、自惚れじやなく、私のことを愛してくれていました。  
私が気付くわけがありません。  
理由は簡単です。  
私には、子種がないんです。  
恵の前に、お付き合いしていた女性と、調べたことがあったんです。  
一緒になろうと思つて、親の反対もあったんで、色々と考えてね。  
そのことが、原因つてわけじゃないんですが、いや、原因だったのかな、最初は彼女も僕に気を遣つてくれてたんですが、結果的に別れてしまつてね。  
その後で、恵と会いました。  
恵は特別でした。その前の彼女なんて、すっかり忘れてしまうくらいに。  
多分、恵もそう思つてくれたたと思います。  
私たちは、会うべくして会つたのです。  
でも私は、恵に言えませんでした。  
だから、どんなに恵と愛し合つていようと、私たちに、子どもができるわけがないんです。  
知つていたんです。  
最初から。  
でも、それでも良かった。  
恵は、子どもを欲していた。  
恵は、子どもを欲していたんですから。  
忘れられません。  
僕に妊娠を告げた時の恵の笑顔。

::

私が殺したんです。

私の子どもじゃなくても良い。

恵が幸せなら、それで良い。

ずっとそう思ってきました。

いや、ずっと言い聞かせてきたんでしょう。

あの時、恵と黒川君が話しているのを偶然聞いた時、私の中の、何かが、破裂したんです。

その後のことは、覚えてません。

包丁の指紋を拭き取り。

公園で遊んでいた勇樹と佳純を迎えに行つて、3人で、スーパーに行つて、勇樹と佳純に

アイスを買つてやつて、何食わぬ顔をして、家に戻りました。

後は、皆さんが知つてるように、犯人が見つからない、殺人事件になったわけです。

私が、恵と、黒川君を、殺したんです。

照明、ゆつくりと全体を照らす

勇樹、登場

勇樹 寝ないの。

正作 ::

勇樹 何を考えてるの。

正作 :: いや。

勇樹 俺は、

正作 勇樹。

勇樹 :: 何。

正作 寝てないのか。

勇樹 :: 寝てるよ。

正作 そうか。

勇樹 俺のことは、心配しなくていいよ。

正作 この前、お前の部屋に入った。

勇樹 :: そう。

正作 良い絵じゃないか。

勇樹 ::

正作 なぜ、最後まで描かない。

勇樹 あれは、駄目だ。

正作 そんなことない。

良い絵だ。

勇樹 父さん。

正作 ::

勇樹 俺の絵が、何て言われてるか知ってる。

正作 ::

勇樹 残念ながら、父さんの才能は、継げなかったつて。  
正作 お前はお前の絵を描けば良い。  
鼻真目なしに、お前は良いものを持つてる。  
黄色の使い方が、素晴らしい。  
一度、自分が思ったまま、最後まで描いてみる。  
周りの評価なんて、気にする必要ない。  
お前はお前の絵を描け。  
勇樹 俺は父さんの絵を描きたい。  
正作 ∴  
勇樹 何で俺が画家になったと思う。  
正作 ∴  
勇樹 俺が、父さんの息子だから。  
正作 ∴  
勇樹 俺は父さんの絵を描きたいんだ。  
正作 ∴  
勇樹 俺は大丈夫だよ。  
正作 ∴  
勇樹 佳純、良いの。  
正作 ああ。  
勇樹 俺は反対だ。  
正作 今日だつて、俺の鼻血くらいで、あんな風になつてるんだぞ。  
勇樹 佳純も、もう子どもじゃない。  
私たちと離れて暮らした方が、良いのかもしれない。  
勇樹 佳純は、俺たちが守る。  
俺たちは、ずっと一緒にいるべきなんだよ。  
正作 勇樹。  
勇樹 父さん言つてたよな。  
佳純が、母さんに似てきたつて。  
佳純が、母さんみたいになつたらどうするんだ。  
父さんはそれでも良いのか。  
正作 ∴  
勇樹 俺も思うよ、佳純がどんどん母さんに似てきた。  
佳純を見ると、あの女を、  
正作 やめる。  
勇樹 ∴  
正作 いつまでも一緒にはいられないんだ。  
勇樹 俺たちは、離れたら駄目になる。  
正作 そういつ時期が来たんだ。  
勇樹 そんなことない。  
正作 お前も。

勇樹 嫌だ。  
正作 いつかは、ここを出て行って、  
勇樹 俺はずっと父さんの傍にいる。  
正作 お前も自分の道を  
勇樹 俺は自分の道を歩いてきた。  
俺も佳純も、父さんの子どもだ。  
正作 そうだ。  
勇樹 だから、俺も佳純も、ずっと父さんの傍にいるんだ。  
正作 勇樹。  
勇樹 な。そうだろ。  
正作 勇樹。  
勇樹 俺たちは離れたら駄目なんだよ。  
俺たちは、離れたら、父さんの子どもじゃなくなっていくんだよ。  
正作 そんなことない。

佳純、登場

佳純 ちよつと、どうしたの。  
勇樹 俺たちは、父さんの子どもでいたいんだよ。  
正作 お前たちは、俺の子どもだ。  
勇樹 違う。  
違う。  
違う。  
年を取る毎に分かるんだ。  
俺がああ男に似ていくのが。  
どんどん、あんな男に似ていくんだよ。  
正作 お前は俺と恵の子だ。  
勇樹 使いたい色が違う。  
構図が違う。  
何より才能が違う。  
俺は、俺は、あいつの子なんだよ。  
俺たちは、一緒にいなきや駄目なんだよ。  
佳純 どういうこと。  
正作 ∴  
勇樹 ∴  
佳純 どういうこと。  
正作 佳純。  
佳純 お父さん。どういうこと。  
正作 ∴  
佳純 お兄ちゃん。どういうこと。

何を言ってるの。  
何があつたの。  
正作 何でもない。  
佳純 何でもないわけじゃないじゃない。  
正作 何でもないんだ。  
佳純 やめてよ。  
もうやめてよ。  
お兄ちゃんが、そんな風に取り乱して、父さんが大きな声出して、何でもないわけじゃない。  
やない。  
どういうこと。  
私たちは、一緒にいなきや駄目だつて。  
離れたらお父さんの子どもじゃなくなるつて。  
正作 ∴  
佳純 私が血を見ると駄目になるのも、お兄ちゃんが、ちよくちよく鼻血を流すのも、関係があるの。  
お母さんが死んだことに、私の知らない何かがあるの。  
∴  
私とお兄ちゃんは、お父さんの子どもじゃないの。  
正作 ∴  
佳純、勇樹。  
父さんは、お母さんも、お前たちも、本当に、心から、愛してる。  
佳純 そんなことが聞きたいんじゃない。  
正作 ∴  
お母さんは、父さんが殺した。  
勇樹 やめろ。  
正作 うるさい。  
勇樹、少し黙ってる。  
勇樹 ∴  
正作 いつかは言わないといけないと思つた。  
いつかは  
∴  
そう。佳純、お前も、勇樹も、お父さんの子どもじゃない。  
なぜなら、お父さんには、子どもを作る能力がないから。  
お前たちは、俺じゃない男と、お母さんの子どもだ。  
最初からわかつてたんだ。  
でも、それでも良かった。  
それでも、全然構わなかった。  
今もその気持ちは変わらない。  
誰がなんと言おうと、勇樹も佳純も俺の子だ。  
∴



あの日。  
俺は、打ち合わせがあつて、外に出ていた。  
思いのほか、打ち合わせが早く終わつて、俺は急いで家に帰つた。  
勇樹の誕生日だったからな。  
お前たちが、遊びについて帰ってくる前に、家の飾り付けをしようと思つた。  
そしたら、お母さんと、あの男が、家にいた。  
お母さんと、あの男が、久々に会つたのは、すぐに分かつた。  
もうその時には、二人に何の関係がないのも、すぐに分かつた。  
でも、抑えられない何かが、俺の中に生まれたんだ。  
いや、その時生まれたんじゃない。  
ずっと、俺の中にあつたんだ。  
偶然とはいえ、勇樹の誕生日に、家に来てしまつたつてこともあつたのかもしれない。  
俺は、二人が許せなかつた。  
こつそりと台所に行つて、  
後は、覚えていない。  
気付いた時には、目の前で、二人が倒れていて、  
お前たちが、帰つてきていた。  
勇樹は、泣いていて。  
佳純、お前は、お母さんが流した、血の上に立つていた。

佳純

： 嘘。

正作

： 。

佳純

嘘よ。

正作

： 。

佳純

嘘つて言つてよ。

正作

： 。

勇樹

佳純、

正作

勇樹。

勇樹

： 。

正作

すまなかつた。

佳純

： 。

ちよつと待つてよ。

何で、自普しなかつたの。

何で、あんたは、父親面して、私たちの傍にいるの。

何で、あんたは、私たちのお母さんを殺しといて、普通の顔して生きてこれたの。

ねえ、何で。

何で。

何で。

何で。

正作

お前たちを守りたかつたんだ。

佳純

は。

正作

俺が自首すれば、お前たちはどうなる。

誰がお前たちを育てていく。

誰がお前たちを、周囲の目から守ってくれる。

どうしたって、色々なことが明るみになる。

母親の不倫の間にできた子ども。

ずっと父親だと思ってた男に、両親を殺された子ども。

誰がお前たちに愛情を注いでいく。

決めたんだ。

誰に何と思われても構わない。

この先にどんな罰が待っているように構わない。

全てを隠して、俺がお前たちを守る。

だから自首しなかった。

佳純

::

正作

::

佳純

頭おかしいんじゃないの。

ねえ。

頭おかしいんじゃないの。

何言ってるの。

意味わかんない。

正作

今まで黙ってて、すまなかった。

佳純

::

お兄ちゃんは、知ってたの。

知ってて、この人を、お父さんって呼んだの。

私たちのお母さんを殺したこの人を、お兄ちゃんは、何でお父さんって呼べるの。

みんなおかしいよ。

みんな頭おかしいよ。

お兄ちゃん、何か言つてよ。

おかしいよ。

ねえ。ねえ。ねえつて。

佳純、榮作のような感じ

正作、佳純の方へ

佳純

来ないで。

正作

::

佳純

助けて。

ねえ、助けて。

お兄ちゃん。::お父さん。

勇樹

俺が殺したんだ。

正作

::

佳純

::

勇樹

俺が殺したんだ。

正作

勇樹。

勇樹

もう良いよ。

正作

やめる。

勇樹

父さん、もう良いよ。

正作

やめる。

勇樹

::

正作

やめる。

勇樹

俺が殺したんだよ。

正作

::

勇樹

もう耐えられないんだ。

父さんが、自分が殺したことにして、自分が殺したと思ひ込んで生きていくのが、もう耐えられないんだ。

俺知ってるよ。

父さんが、まるで懺悔してるかのように、毎晩何かに話しかけてるのを。

俺たちを育てるために、ずっと、苦しんできたのを。

だからさ、もう良いんだ。

正作

::

勇樹

佳純、俺が殺したんだよ。

あの日、俺とお前が、神社で遊んでから、家に帰った時、父さんはまだ帰ってなかった。

お客さんがいたから、俺とお前は、静かに自分たちの部屋へ行ったんだ。

お前がアイスを食べたいって言ったから、俺は静かに台所へ行き、アイスを取りに行った。

その時に、俺、聞いたんだ。

母さんとあの男の会話を。

俺は、母さんが責められてるような気がして、男に敵意を持った。

で、こつそり話を聞いている内に、男が言ったんだ。

自分の子どもじゃないかって。

色んなことの、意味が分からなかったけど、その言葉だけは、はっきりと聞こえたよ。

そして、こつそりと部屋を覗いた。

何だろうな。

分かっちゃったんだよ。

俺の耳が、鼻が、目が、口が似てるんだよ。

分かっちゃったんだよ。

この人が俺の本当の父親だって。

::

全てに対して敵意が生まれた。

気付いたら、あの男を殺してた。母さんを殺してた。

その後は、何も覚えていない。

どれくらい時間が経ったのかもわからない。  
気付いたら、お前は血だらけの俺の傍で泣いていて、父さんがいた。  
殺したのは、父さんじゃない。  
俺なんだよ。

佳純  
勇樹

::  
::  
佳純、ごめんな。  
父さん、ごめんなさい。

勇樹、佳純崩れる。  
正作、すっと立ち上がり、退場  
包丁を手に入場  
勇樹、佳純、正作をゆっくり見る

正作

ごめんな。

勇樹、佳澄、全てを受け入れたかのような微笑み  
照明、ゆっくりと暗転

照明、全体を照らす  
舞台上、勇樹と佳純が倒れている  
正作、床を一心不乱に拭いている。  
その後、椅子に座る

正作

もうすぐ冬になるね。  
毎年この季節が嫌いだっただ。  
寒いからじゃないよ。  
木々が落葉を始めると、それまで見えなかった、鳥の巣が露わになってくる。  
鳥の巣だけじゃなく、あの事件も露わになるような気がしてね。  
乾燥した落葉を踏むたびに、自分が作りあげた壁が崩れ落ちていつてるような気がするんだ。  
カサカサ、カサカサ、少しずつ、削られるように。  
春には、気持ちよさそうに川を泳いでいるカモの親子も、この季節には、川と岸のすれすれの場所で、寒そうに佇んでる。  
春と一緒にいた、子どもたちの姿は見えない。  
全てが悲しく映るんだ。  
色んな色があるはずなのに、モノクロの世界だよ。  
きっと人は、何かを失うたびに、一つずつ色彩を失っていくのかもしれないね。  
暖かく、穏やかな西日も、身体のおままでは温めてくれない。  
この季節が嫌いだっただ。

早く冬になって欲しいと思うんだ。

寒さが全ての動きを止めてしまうように思えてね。

むしろ、そちの方がどれだけ気が休まるか。

え。

幸せだったよ。

勇樹と佳純が成長していく様を見てこれたのは、本当に幸せだった。

君に見せたかった。

全部思い出すことができるよ。

佳純がお父さんと結婚するって言ってくれた時は嬉しかったなあ。

お父さん、何でもやってくれるから、便利だからだつて。

佳純はね、年頃になっても、俺のことを嫌わなかったんだ。

俺もなかなかのもんだろ。

今日、一人暮らしをしたい。って言われたよ。

そらだ。

佳純がね、どんどん君に似てきてるんだ。

でも、佳純は料理は上手いぞ。片づけはあまり得意ではない方だが、料理は上手い。君は

あまり料理は得意ではなかったけど、その部分は、僕に似たようだ。

綺麗になった。本当に綺麗になった。

君と出会った時を思い出すよ。

でもね、同時に、勇樹は、そんな佳純を見るたびに苦しそうだつた。

勇樹は、…勇樹は、守ってやれなかった。

1986年11月10日。

勇樹の10歳の誕生日。

勇樹の時間は、10歳の時から止まったままだったのかもしれない。

俺は一生懸命、勇樹に言ったよ。

勇樹が悪いんじゃない。勇樹は何もやってない。

来る日も、来る日も。

だつて、生きて欲しかったから。

君もそうだろう。

最初は、部屋に籠ったままだったけど、少しずつ外に出るようになって、お兄ちゃんとして、佳純を守ることが、自分の使命かのように生活してたよ。

俺は、そんなに口うるさい方じゃないからね、勇樹が佳純の母親のようだった。

どんな思いで、画家になろうとしたのか、俺にはすぐに分かったよ。

分かっただけでも、何も言えなかった。

4年前、時効をむかえて、もうこれで事件が解決することがなくなった日。

これで勇樹が疑われることはなくなった日。

俺もずっと二人の傍にすることができるようになった日。

どんな気持ちでその目を迎えるのかと思ったけど、何一つ変わらなかった。

勇樹の苦しみは、佳純の奥底にしまわれた記憶は、何一つ変わらなかった。  
そして、俺の無力さも、何も変わらなかった。  
どれだけ拭いさろうとしても、何一つ消えなかったよ。

恵、俺は、君を恨んでなんかいないよ。  
出会った時から、俺の想いは何一つ変わっちゃいない。  
今までも、これからも。  
この前読んだ本にね、目的論的生命観って言葉あつてね。  
もちろん全部読んだけど、その言葉が気に入つてね。  
君は、子どもが欲しかった。  
できれば、俺と君の子ども。  
女性の本能として、子どもが欲しかった。  
それの何が悪い。  
でも、俺には無理だった。  
君が俺に妊娠を告げた時の顔、忘れられないよ。  
君がどんな思いで、黒川君と付き合ってたのか、それは俺には分からない。  
でも君は言ってくれたね。  
俺と君の子だつて。  
それで良かった。  
それで良かったんだ。  
君が幸せなら、俺は幸せなんだから。  
おそらく君は、俺が、自分の子どもじゃないと分かっていたことに、気付いていたよね。  
そして、それが君を苦しませていた。  
俺にはそれが辛かった。  
君が愛した勇樹を、佳純を、俺は君と同じように愛していくことは、当たり前なのに。  
それが俺の贖罪なのに。  
俺に子種がなかったから。  
俺が悪いんだから。  
俺が悪いんだよ。  
恵、すまなかった。

俺という生命の目的は何なんだろう。  
君が死んでから19年、必死で生きてきたよ。  
でもね、何も見つからない。見つけられなかった。

もう一度、君に会いたい。  
恵、君に会いたいよ。  
君は天国にいるんだろ。  
天国で、幸せに暮らしているんだろ。  
でも俺は、地獄に行かなければならない。

勇樹と佳純をよろしく頼むな。  
二人は何も悪くないんだ。  
きっと君の傍に行くだろう。  
俺が育てから、愛情が足りなかったかもしれない。  
二人を、今までの分も、愛してやってくれ。  
いつかは、希望の光が、包んでくれると思ってた。  
光の中で、4人で暮らしていけるとと思ってた。  
何でだろうな。  
何でだろうな。  
何でだろうな。  
分かってる。俺が悪いんだ。  
恵、君が恋しいよ。  
君が恋しいよ。  
愛してる。  
君のことを、心から、愛してるよ。

照明、台詞終わりで暗転  
音楽